

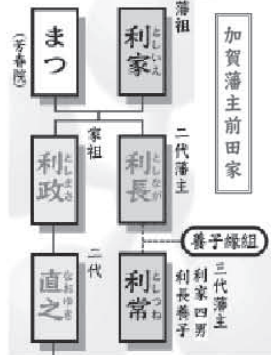
# 前田家の生き残り戦略か？

## 関ヶ原の戦いで利政がとった選択

いしかわ観光特使 西島 幸夫



前田利政



前田家の系図

の娘・籍)が石田三成の人質になつており、その身を案じて出陣を見合わせた

加賀藩の前田利政(1578~1633)は前田利家(藩祖)とまつ(次男)で、能登22万石余を領有した大名だ。ところが利政が関ヶ原の戦いでとった選択は、彼のその後の命運を大きく変えた。

慶長4(1599)年、利家が没して長男の利長が二代藩主を継ぎ、まつは剃髪し芳春院と号した。この頃、前田家は権力を掌握した徳川家康から様々な圧力をかけられ、存亡の危機に立たされた。何とか和解の道が開かれ、その条件に従って、まつは人質として慶長5年5月、江戸へ下向する。同年9月、藩主利家は徳川から関ヶ原の戦いに出陣を要請され応じたが、弟の利政は病と称して出陣を拒否した。その理由は妻(蒲生氏郷

といわれている。これには諸説あり、利政が豊臣方に味方し前田家存続のため両陣営に賭けたのだという見方もある。関ヶ原の戦後処理で利政は改易された。前田家は利政を出家させ、京都に茶人(宗悦)として逃がす。関ヶ原の戦いの顛末である。

### 知られざる利政の消息

筆者が正史から消えた利政の消息を知ったのは、恩師の三宅義夫先生(注1)が利政を調べておられたからで、本稿はその聞き書きである。三宅家の祖先が利家夫人まつと関わりがあり、加賀藩近江今津の庄屋が所蔵していた古文書が当家に伝わっていた。

近江今津は琵琶湖の湖北にある加賀藩の飛地だ。まつが豊臣秀吉から化粧料として文禄4(1595)年に贈られた。石高は2430石。加賀藩の回米や産物は今津から船に乗せられ大坂に下つていき、今津は湖上交通の要地として栄えた。

まつは絶えず利政の境遇を心配し、処置改善を幕府と交渉したことが消息に残されている。利政の京都での寓居先は豪商角倉了以だった。利政の生活費は今津の年貢から密かに渡すことを庄屋に依頼していた。利政の娘は角倉一族に嫁ぎ、化粧料として300石渡されている。角倉了以は朱印船貿易で莫大な富を得、京都の水上交通の動脈になる高瀬川を開削し舟運を開いた。了以の子、素庵は角倉流として一家をなした能書家で、本阿弥光悦の弟子。光悦は書画、陶芸、漆芸に通じた芸術家で前田家から200石の食知を受けている。角倉素庵は上層の町人文化を支えるパトロン的存在であったらしい。

### 風雅自適に生きた利政

京都紫野の大徳寺に、まつによつて慶長13(1608)年に建立された芳春院という塔頭がある。庭園の池中に立つ二重楼閣建築の呑湖閣(非公開)は金閣・銀閣と並び称される京の四閣の一つである。庭園は小堀遠州の作だ。遠州は茶人で遠州流の祖。建築・造園でも才能を発揮した。芳春院はまつが造営し



呑湖閣 大徳寺芳春院の楼閣

たことになっているが、江戸在住のまつに代わつて利政が差配した。この塔頭にも今津から年100石贈られている。廃嫡になった利政は金沢野田山の前田家墓所に入れないため、芳春院は自らの墓所だった。先年訪れる機会があり、特別に呑湖閣を拝観した。静寂な庭園と楼閣の前に一人佇むと一瞬400年前にタイムスリップしたようだった。茶人利政は京の嵯峨野に隠棲し、自由気儘な生涯を送った。

一流の文人や豪商との交流を楽しんだという。光悦も遠州もたびたび金沢を訪ねており、金沢は早くから京文化と深い関わりがあった。

芳春院(まつ)は利政の子、直之を幼少の頃より養育し、自分の禄高を分け与えた。長男の利長には男子がいなかったの

2002年、利政を家祖とする前田土佐守家の資料館が金沢市片町に開館した。忘れられていた利政の名が、日の目を見たことは喜ばしい。(了)



前田土佐守家資料館(金沢市片町)

(注1) 三宅義夫(1996年没)元立教大学名誉教授(金融論)、元日本学術会議会員。  
 (注2) 「八家」加賀藩年寄役(家老)を務める門閥八家。